

まとめ:

1) 本症の骨転移率は、加齢とともに増加し、Total 55例中29例(52.7%)であった。

2) 骨転移の好発部位は、腰椎(75.9%)、骨盤(69.0%)、肋骨(51.7%)であった。

3) 骨転移巣のX線写真(x-p)との関係は、骨x-p所見にて、骨硬化型を示したものが23例中13例(56.5%)、骨溶解型3例(13.0%)、混合型3例(13.0%)、明らかな異常所見が得られないもの4例(17.4%)であった。骨シンチでは、陽性像20例(87.0%)、混合像3例(13.0%)であり、欠損像のみのものはなかった。

4) 骨転移例の予後は、特に多発性転移のものについて悪く、骨シンチ施行後1年以内に死亡するものが多かった。

5) 骨転移進展度と血中AIP, AcP, およびPAPとの関係では、骨転移例は陰性例に比し、3者とも高値を示す傾向にあった($p < 0.05$)。

また、PAPについては、骨転移単発例と多発例の間にも有意差を認めた($p < 0.05$)。

36. 骨シンチグラムにおける陽性肢

仙田 宏平(名一日赤・放)
河村 信夫 月田 邦彦 榊原 弘之
大西 勝治(同・放部)

骨シンチグラムに見られる四肢軟部の広範均等な骨外集積像(陽性肢)について、その出現機序ならびに臨床的意義を検討した。

対象は、最近骨シンチグラフィを行った約400症例中、陽性肢を認めた21症例であった。その内訳は乳癌9例、直腸癌と悪性黒色腫各2例、その他8例で、その大多数が術後症例であった。陽性肢の出現部位は7例で片側上肢、7例で片側下肢、4例で両側下肢、3例で四肢にあった。理学所見上、これら部位に一致した浮腫が15例で検査時点に認められ、また3例では検査後10日から3か月後に明らかとなった。浮腫の明らかでなかった3例中1例は同時期に行ったリンパ節シンチグラフィで患側に異常所見を認めた。リンパ節シンチグラフィの施行された5例はいずれも患側に異常所見を示し、浮腫の明らかな3例で管外漏出像を認めた。四肢全部に陽性肢のあった例では軀幹軟部にも集積増加が見られ、その内2例は腎不全を合併していた。他方、両下肢陽性の1例は

鉄欠乏性貧血の治療中であった。これら症例の陽性肢の放射能分布は均等であったが、片側の陽性肢例では皮下領域により高い傾向があった。陽性肢類似の骨外集積像は横紋筋肉腫や筋炎の症例で経験したが、これら症例の異常集積像は皮下深部に比較的限局する傾向があった。以上の検討結果より、軀幹軟部への集積増加のない陽性肢はリンパ浮腫によって出現し、その出現は理学所見に先行すると考える。

37. 大腿骨頭壊死の骨シンチグラフィ

牧野 直樹 竹内 昭 浅野 智子
安野 泰史 佐々木文雄 古賀 佑彦
(名保大・放)
安藤 謙一 片田 重彦(同・整形)

大腿骨頭壊死における骨シンチグラフィの意義について検討した。

対象は、大腿骨頭無腐性壊死26例、33関節で、内訳は特発性大腿骨頭壊死20例と、その他6例である。^{99m}Tc MDP 20 mCi 静注後3時間像と、ほぼ同時期の股関節単純X線写真とを比較して病期分類を行った。

骨シンチは超早期から所見を明瞭に描出していたが、集積程度は病期に比例していなかった。しかも股関節単純写真との所見の解離が明らかで、早い時期に目立ったが、反面遅い時期にはX線所見とかなり一致していた。

骨シンチは早い時期には局所の血流或いは、修復状況を反映しているようで、X線撮影では得られない状態を示し、病勢や予後判定の可能性を示唆するものであった。さらに、いわゆる cold in hot の所見が全般的に大腿骨頭壊死にはかなり特徴的で、6割以上の関節に認められ、特に早い時期の診断に有用と思われた。

大腿骨頭壊死において骨シンチの診断的意義は高く、早い時期にはX線撮影以上の情報を提供するものであり、欠かせない検査と思われる。